

中学校 社会科 部会

部会長名 大任町立大任中学校 校長 安藤 志保美
実践者名 福智町立赤池中学校 教諭 野村 純平

1 研究主題

思考力・判断力・表現力を高める社会科学習指導の研究

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は激しい挑戦の時代を迎えると予想される。現代社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会が急速に変化しており予測が困難な時代となっている。このような変化の激しい社会を生きることになる子供たちには、その変化に主体的に関わり、その過程を通して、自らの資質・能力を高めながら、よりよい社会と幸福な人生の創り手となることが望まれる。そのためには、社会的事象を単なる知識としてとらえるのではなく、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、応用力のある生きた知識として身につけることが求められている。そこで本研究では、新しい学習指導要領に示された、学校教育を通して育成する資質・能力のうち、特に生徒の思考力・判断力・表現力を高めることをめざし、本主題を設定した。

(2) 生徒の実態から

田川地区の子供たちを取り巻く教育環境は必ずしも恵まれているとは言えず、学力向上は喫緊の課題である。また、いわゆる学力の二極化も進んでいる。そこで、基礎基本を身につけさせると同時に、思考力・判断力・表現力をバランスよく、効率的に高めていくことが必要であると考え、本主題を設定した。

3 主題の意味

(1) 「思考力」とは、自分の考えをもって他者と対話し、考えを比較・吟味して統合する等の活動を通して、よりよい答えや知識を創り出す力である。

(2) 「判断力」とは、必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択、関連づけ・統合することにより、自分なりの結論を導き出す力である。

(3) 「表現力」とは、伝える相手や状況に応じて、思考・判断したことを話したり書い

たりして、自分の考えを表す力である。

4 研究の目標

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、思考力・判断力・表現力の育成を図る。

5 研究仮説

学習過程において、次のような手立てをとれば、思考力・判断力・表現力を高めることができるであろう。

- 資料をもとに、自分の考えをまとめ、記述する活動に取り組みさせる。
- 他者との意見交流を通して、自分の考えを広げさせる活動に取り組みさせる。
- 授業の後半に、再度、自分で答えを出す（考えを深めさせる）活動に取り組ませる。

6 研究の計画

(1) 単元名 「生産と労働」

(2) 指導観

- 本単元は、平成20年度告示の学習指導要領における、公民的分野の内容項目(2)-アに関連した内容であり、消費生活とそれにかかわる消費者問題や、価格の働きに基づく市場経済のしくみ、現代社会における企業の果たす役割と責任、職業の意義と役割及び労働条件の改善等について主に扱うものである。グローバル化や少子高齢化など、我々を取り巻く環境は日々大きく変化しており、そうした中で市場経済についても地域や一国の経済のみならず、世界市場を包括的にとらえて経済活動を営むことが求められるようになったことや、男女の雇用機会均等、外国人材受け入れの是非、労働環境や労働条件の改善など、生産と労働にかかわる課題は多く見られ、また今後も様々な課題に直面することが想定される。そうした課題に対して関心をもち、積極的に解決していく姿勢が求められており、既習の学習内容に加え、本単元を学習することは、私たちの生活に大きな影響を与えている経済活動の諸問題に着目し、自ら考える態度を育てる上で非常に意義深いものであると考える。
- 本学級は男子14名、女子17名の計31名から構成される。学習の実態及び事前に行ったアンケートの回答については以下の通りである。

・標準学力検査における観点別評価段階

	A	B	C
4月標準学力分析検査(思考・判断・表現)	5名(17%)	14名(47%)	11名(37%)
4月標準学力分析検査(資料活用)の技能)	6名(20%)	17名(57%)	7名(23%)
4月標準学力分析検査(知識・理解)	7名(23%)	14名(47%)	9名(30%)

上記の表から、思考・判断・表現にかかわる能力が技能、知識・理解に比べると十分に習得できていない生徒が多くいることを見て取ることができ、実際の授業においても知識や資料同士を関連づけて考察することの出来る生徒は少ない。事前に行った

アンケートの結果では、【社会の授業は好きですか】といった質問に【はい】と答えた生徒が24名と多く、学習に対しては非常に意欲的に取り組み、授業中も質問や課題に対して積極的に答えよう、考えようとする生徒が多い。しかし、【社会の授業・テストで苦手なことは何か】といった質問に対しては、【文章で答えたり、表現したりする問題】と回答した生徒は14名にのぼり、自らの言葉で表現することに苦手意識を持つ生徒が多いのが現状である。

- 本単元では、まず、企業の仕組みと、資本主義経済のメリット・デメリットについてまとめる。ここでは、地理的分野での学習をふまえ、大企業と中小企業を提示し、共通点や差異について考えさせる。その際には、図示させることで違いをとらえやすくする。次に、株式会社の仕組みについてシミュレーションを通じてとらえさせ、CSRが求められるようになった原因を考えさせる。ここでは、公害問題についても再度取り上げ、歴史的背景からも現在の企業に求められている役割をとらえやすくすることで、多面的・多角的に物事をとらえることができるようにする。その際には、ICTを活用することで複雑な仕組みについて図式化して資料を提示する。さらに、労働の意義と労働者の権利について、既習の学習事項をふまえた上で、ワーク・ライフ・バランスを実現するために必要なことは何かを自らの言葉でまとめ、交流する活動を行う。ここでは、労働のあり方について考えやすくさせるために、自由権や社会権の学習で学んだことを想起させることでより深い考察ができるようにする。その際には、労働三法の果たす役割について考察させた上で表現する活動を取り入れる。最後に、現在も深刻な社会問題として取り上げられるブラック企業をどのように改善していけば良いかについて考察し、自らの言葉でまとめ、交流する活動を行う。ここでは、企業・労働者・政府（行政）の立場から改善点をまとめさせ、交流する活動を取り入れることで、社会問題に対して一面的な見方ではなく、多面的・多角的に労働問題についてとらえることができるようにする。

(3) 目標

- 生産と労働のしくみについてとらえ、現代の労働問題について積極的に解決する方法を考察しようとしている。 (関心・意欲・態度)
- 企業のあり方や雇用、労働問題に関わる課題とその解決策について、諸資料をもとに多面的・多角的に考察し、自らの言葉でまとめることができる。 (思考・判断・表現)
- 大企業と中小企業の差異や資本主義経済の長所・短所を資料から読み取り、図にまとめることができる。 (技能)
- 企業のはたらきや仕組み、労働問題について理解し、その知識を身につけることができる。 (知識・理解)

(4) 単元指導計画

次	時数	学習活動・内容	評価規準				評価方法
			関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解	
一	1	1 大企業と中小企業			・資本主義のメリット・	・資本主義経済の仕組	ワークシート

次		の共通点と差異を図示し、資本主義のメリット・デメリットについてまとめる。		デメリットについて資料をもとに自らの言葉で図にまとめている。	みや、大企業・中小企業の違いについての知識を身につけている。	小テスト
二 次	1	2 株式会社の仕組みをとらえ、CSRが求められるようになった背景を説明する。	・諸資料をもとに、CSRが求められるようになった背景を積極的に追究することができる。			様相観察
	1	3 労働の意義と労働者の権利について整理し、ワーク・ライフ・バランスを実現するために必要な事を論述する。		・ワーク・ライフ・バランスを実現するために必要なことを、多面的・多角的に考察し、自らの言葉でまとめることができる。	・労働の意義と労働者の権利について、日本国憲法や自由権・社会権とも関連づけた上でその知識を身につけている。	ワークシート 小テスト
三 次	1	4 よりよい職場を築くために必要なことは何か、資料を基に自らの言葉でまとめ説明する。		・労働問題の改善のために必要なことを、多面的・多角的に考察し、自らの言葉でまとめることができる。		様相観察 ワークシート

7 指導の実際

(1) 本 時

平成30年11月13日 火曜日 第6校時（第三次の1） 社会科教室2に於いて

(2) 主 眼

働きやすい職場を築くために必要なことを、既習の知識や資料を活用し、多面的・多角的にとらえ、自分自身の言葉で表現することができる。

(3) 授業仮説

より良い職場を築くために必要なことを論述する活動において、企業・労働者・政府の立場から考えられる改善点をまとめさせ、交流する活動を取り入れれば、生徒は多面的・多角的に考察することができ、働きやすい職場を築くために必要なことを説明することができるであろう。

(4) 準 備

○学習プリント ○資料プリント ○視聴覚機材 ○パソコン ○タブレット

(5) 展 開

	学習活動・内容	指導上の留意点 ◇評価規準（方法）	配時
導	1 前時までの学習内容を振り返り、めあてを確認	○ 課題意識を持たせるために、様々な労働問題について	5

入	認する。	とりあげ、掲示することで、本時の学習に対する意欲付けを行う。	
	めあて 働きやすい職場を築くために必要なことを、資料を活用し説明しよう。		
展 開	2 資料をもとに、今の日本にはどのような労働問題があるのかをまとめる。 ・長時間労働 ・非正規労働者の増加 ・社会的弱者の労働環境	○ 多くの労働問題が日本にあることをとらえさせるために、ICT等を活用して労働問題を提示することで、学習に対する意欲付けを行う。	8
	3 様々な労働問題があることをふまえた上で、働きやすい職場を築くために必要なことを個人で考察し、まとめる。 ・労働三法、労働者の権利 ・働き方改革 ・ワーク・ライフ・バランス	○ 労働問題の要因は一つでは無いことに気づかせるために、企業・労働者・行政それぞれの立場から考察させることで、多面的・多角的に問題をとらえさせる。 ○ 自らの意見を記述しやすくするために、既習の学習内容を活用することを指示することで、より具体的な解決の方法をとらえやすくさせる。	10
	4 班で意見を交流し、他者の意見の良いと感じた点や、自分が持っていなかった視点などをメモする。	○ 課題や、解決策も様々なものがあることをとらえさせるために、班での交流活動で異なった意見をメモさせ、労働問題について多面的・多角的にとらえやすくする。	12
終 末	5 意見交流を通し、再度、働きやすい職場、労働環境を作り上げていくために必要なことを自らの言葉でまとめる。 ・法律の周知・徹底 ・労働者の権利 ・社会的弱者への配慮	○ 働きやすい職場が実現するとどのような利点があるのかをとらえやすくするために、労働時間と生産効率について図示したグラフや整った労働環境の職場の例を提示することで、労働と生活とのバランスのとれた両立の必要性を考えやすくする。 ◇ 労働問題の改善のために必要なことを、多面的・多角的に考察し、自らの言葉でまとめることができる。	10
	6 本時のまとめを行う。		5
	まとめ 働きやすい職場、労働環境を作り上げていくためには、企業、労働者、行政がそれぞれの立場から必要なことを考え、実行していく必要がある。		

8 研究のまとめ

思考力・判断力・表現力は、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせた学習活動を通して育成される。そして、この学習活動を繰り返すことで、見方・考え方がさらに豊かなものになり、主体的・対話的で深い学びへとつながっていく。今回の研修会では、「働きやすい職場を築くために必要なことを、企業・労働者・政府の立場から改善点をまとめ、自分自身の言葉で説明させる」ことをねらいとして公開授業を行った。当日、生



【写真1】「書くこと」を大事にした学習活動

徒たちは労働問題についての資料をもとに個人の考えをまとめ、意見交流を経て、考えを深めていった。ほぼ全ての生徒が授業に集中しており、自分のこととして課題をとらえようとする姿からは、日頃の教科指導や生徒指導が丁寧に行われていると感じた。また、パソコンをつないだ大型テレビを随所に活用した授業であり、ICT活用の有効性を示す授業であった。さらに、「書くこと」を大事にした学習活動ができており、県学力向上策に沿った授業となっていた。事後研修会では、様々な角度から活発な意見交流をすることができ有意義な研修ができた。この日の公開授業のように、生徒が社会的な見方・考え方を働かせ、課題に対して自分自身の言葉で説明することを繰り返し指導することで、思考力・判断力・表現力を高めることができると考える。

9 成果と今後の課題

(1) 成果

- 労働問題についての様々な資料は、生徒の興味や関心を引き出す上で有効であり、生徒が見方・考え方を働かせる上で大いに役立った。
- パソコンをつないだ大型テレビを活用したことも、生徒の興味や関心を引き出す上で有効であり、テンポ良く効率的に授業を進める上で大いに役立った。
- 導入段階（問いづくり）で、実態や課題をテンポ良く確認した後、「このまま就職していく？」、「どうすればいい？」と問いかけたことは、課題に対する動機付けになり、生徒の発言からめあてにつながりにつながった。
- 追究段階（思考づくり1 個人追究）では、企業・労働者・行政のそれぞれの立場（視点）を踏まえて書かせたり、労働三法や働き方改革などの学習したことを使うように指示したりすることで、生徒は自分自身の考えを書きやすかったようである。また、じっくり書く時間を確保したこと（本時では9分間）で、ほとんどの生徒が課題に対する考えをしっかりと書くことができていた。
- 追究段階（思考づくり2 班交流）では、話し合いの約束（内容と方法、役割）が明確に示されており、どの班も熱心に交流でき、生徒は自分と異なった意見を記録するなど新たな気づきが生まれていた。
- 終末段階（価値づくり）では、班の交流活動を踏まえることで、より多角的に課題を捉えるとともに、再度、自分の考えを書かせたことで自分の考えを価値づけることができていた。また、じっくり書く時間を確保したこと（本時では7分間）で、ほとんどの生徒が課題に対する考えを自分自身の言葉で書くことができていた。



【写真2】終末段階の授業風景

(2) 今後の課題

今回の公開授業研修で明らかになったことは、課題の焦点化である。困難な状況や

急激な変化に主体的に対応し、他者と協働的に関わりながら最善策を見出していく「社会の創り手」の育成こそ社会科の使命である。単元を通して、身につけたい力を焦点化し、その達成に向けてより具体的な単元指導計画を作成することが必要である。

- 単元を通して身につけたい力を明確にするためには、働く意義を踏まえ、どのような職場を創りたいのかを明確にする必要がある。
- より課題を多面的・多角的に捉えせさせるためには、単元指導計画を作成する際に、行政の取組や努力、働き方改革に取り組んでいる企業等を追究させる必要がある。